

高齢化集落対策で全国から注目されている綾部市と上越市の議員が意見交換会

月刊誌『ガバナンス』の3月号で、過疎化・高齢化が進む集落対策を進めている自治体として京都府綾部市、上越市が大きく紹介されました。その両市の議会議員が16日、上越市役所で意見交換会を開きました。参加したのは、綾部市議会総務建設教育常任委員会のメンバー8人と上越市議会食料・農業・農村議員連盟のメンバー12人です。

綾部市は人口約3万7000人、面積は上越市の約3分の1。上越市と同じく過疎化・高齢化が進む集落を多くかかえています。昨年12



右側が上越市議、左側が綾部市議の皆さん。16日、市役所委員会室。

月議会、市町村レベルでは全国初といわれる「水源の里条例」を制定したことで、いま、全国から注目されています。同条例は、同市の東部にある高齢人口割合が60%を超えている5集落を守るために、定住対策、都市交流などで地元集落と行政が力をあわせることが書かれています。

意見交換会では、この条例の制定経過や内容をめぐってのやりとりが中心になりました。

綾部市がこの条例を策定する直接のきっかけとなったのは大雪の中で行われた市長選。いまの市長が、雪に苦しむ過疎集落の実態を見て「何とかせにゃあかん」と「水源の里を考える会」を立ち上げ、約半年間の調査、研究をして条例制定をしたということでした。「条例が支援の対象にしている集落以外にも限界集落があるのではないか。そこはどうするのか」などの質問には、「まず条例の対象となる集落対策でモデルをつくり、他地域にも広げていきたい」と答えています。同市では今年の秋にシンポジウムを開催する予定といます。

『ガバナンス』3月号の論文で長野大学の野見教授は、上越市の高齢化集落実態調査などの取り組みについては、「この市行政の積極性を他の自治体も学ぶ必要がある」とのべ、綾部市については、「山村の地域再生を考えると、綾部方式を市町村などが実践していくことが日本の山村の将来を展望する重要な鍵」とのべています。

高齢化集落实態調査まとまる

さて、その上越市の高齢化集落实態調査です

が、昨年11月から進められ、このほど調査結果が発表されました。

調査対象となったのは市内の高齢化率50%以上の53集落。吉川区では後生寺、坪野など7集落が対象でした。調査結果報告書では、全体的な傾向として、「最盛期に比して世帯数は半分以上、人口は4分の1以下に減少」「後継者が同居している世帯はわずか19%」「このまま維持が可能とする集落は5・7%」など深刻な実態が浮き彫りにされました。

3月議会での私の質問に対する答弁で市は、詳細調査、施策の検討を約束しています。

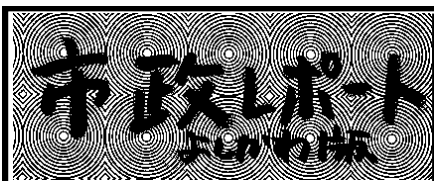
越後と信濃の交流は歴史があり、分野は多様 上越市と長野市の議会交流会で学ぶ

まさか梶の性徳寺の名前が出てくるとは思いませんでした。8日、長野市で行われた交流会の講演の部で紹介された「信濃から移転した寺院」のなかに出てきたのです。永禄年間の移転といますから、もう440年位前になりますね。

講演会では長野市立博物館の降幡浩樹氏が、「川中島の戦いを通してみる上越と長野」と題して話をされました。

降幡氏は「戦いは人・モノ・情報・文化の大移動（交流）だった」と、上杉軍を支えた信濃武士の存在や善光寺信仰、信濃から越後に移転した寺院などの話をとても面白く語りました。

(写真は8日の講演会の模様です)



NO 1295
2007.5.20

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
Tel 548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL http://www1.ocn.ne.jp/~hose/